

転移に対してイレッサ投与, 12月たった現在もSD (stable disease) の状態を維持している。

イレッサは従来肺癌(非小細胞肺癌, 特に腺癌, EGFR 遺伝子変異陽性例)に対して効果があるとされている。本症例においてはEGFR 遺伝子変異の有無は検索していないが, 一定の効果があったことを考えると, イレッサは甲状腺癌, 特に腺癌の肺転移に対する有力な化学療法になる可能性があると考えられる。

4 甲状腺刺激ホルモン産生下垂体腺腫の外科治療

米岡有一郎・神宮字伸哉・妻沼 到
森井 研・田村 哲郎・藤井 幸彦
新潟大学脳研究所脳神経外科

【目的】当科における近年のTSHomaの治療成績を検討する。

【方法】過去10年間に当科で治療され病理診断が確定している7例を後方視検討。

【結果】内訳は男性が4名, 女性が3名で, 入院時年齢は8~70歳(平均37.6歳)であった。全例がNacroadenomaであった。このうち1例(40歳男性)は甲状腺機能亢進症顕性前に頭重を契機とした画像診断にて下垂体腺腫を指摘されたが, 他は甲状腺機能亢進症もしくはInappropriate secretion of TSH (SITSH) で発症。先の3例が顕微鏡下経蝶形骨洞腫瘍摘出術(TSS)にて, 後の4例内視鏡下(eTSS)にて摘出。TSS症例のうち2例で海綿静脈洞浸潤(CSI)を認めたが, eTSS症例ではCSIを認めず。

【成績】TSSでは3例中1例で術後に寛解。eTSSでは4例中4例で術後に寛解し, 退院時にHydrocortisoneの補充を要した症例は無く, 4例中3例でLevothyroxineを補充。

【考案】CSIを有す2例のTSS症例は外科的寛解を得られず。CSIを欠くeTSS症例では4例とも寛解。

【結論】CSIを伴わず, 巨大腺腫でなく, 硬くないTSHomaは, eTSSにより寛解が期待できる。TSHomaは稀ゆえ, 更なる症例蓄積を要す。

5 ミトコンドリア糖尿病(3243変異)に対するCoQ10療法を試みた1例

鈴木 克典・花澤 秀行*
済生会新潟第二病院代謝内分泌科
同 耳鼻科*

症例は男性, 41歳。2006(平成18)年(38歳時)に1型糖尿病と診断され, 埼玉県の某総合病院に3週間入院。混合インスリン2回/日注射の治療が開始された。同時期に両側の難聴を発症し, 感音性難聴と診断されていた。2008(平成20)年(40歳時)に神奈川県総合病院に入院し, Basal-bolus治療に変更された。2009(平成21)年(41歳時)7月7日に自殺目的に新潟市の海岸で昼からインスリン注射をせずにいたところ, 7月8日未明, 腹痛・嘔吐があり, 当院に救急搬送され, 糖尿病性ケトアシドーシスの診断で入院した。肥満歴はなく痩せ型(BMI 15.5kg/m²), インスリン分泌能低下, 難聴などの臨床像からミトコンドリア糖尿病を疑い遺伝子解析を行った。ミトコンドリア遺伝子異常(3243A→G点変異)を認め, ミトコンドリア糖尿病と診断。食事療法, インスリン療法とともにcoenzymeQ10(CoQ10)療法を開始した。2010年1月に施行した聴力検査において感音性難聴の若干の改善を認めたが, インスリン分泌能は不変であった。

ミトコンドリア糖尿病に対するCoQ10療法は試みられるべき有用な治療法の1つと考えられた。

6 胃酸分泌抑制薬と生活習慣病

山田 絢子・高村 麻子・早川 晃史
高澤 希子・山谷 恵一
新潟通信病院内科

近年, 非肥満糖尿病マウスにDPP-4iとPPIの併用療法を行うと血糖値が正常化したとの論文発表があった。我々はヒトでも血中ガストリン濃度が糖尿病に関与するのか? 胃酸分泌抑制薬内服中の患者は糖尿病や他の生活習慣病の合併に差異や特徴があるのか? を検討するために調査を行った。